

ゴルバチョフ体制と中ソ関係

ゆるやかな同盟に変容へ

東京外大教授
中嶋 嶺雄

去る九月三日の夜、私はモスクワにいた。日本大使官邸での招宴ののち、十
年前とまったく変わらぬ粗末な設備の「科学アカデミー・ホテル」に戻って、
九日間のモスクワ滞在の忙しいスケジュールもこれで終わったと一息ついたの
だが、その夜のモスクワは、どこかく華やいた雰囲気であった。

ふと意外に目を転ずると、薄明の夜空に火花があがっている。一体、今夜は
何となくと尋ねると、それは日本がミンスキー号艦上で降伏文書に署名した日か
ら四十周年目のお祝いだったのであった。

このような光景に接して、もとより私は心中複雑な感慨にとらわれたが、翌
朝のタス通信は、ちょうどその夜に、ソ連共産党のアリエフ政治局長がソ中
国大使館に招かれ、一時間以上も歓談したと報じていた。

しかもその肩書は、「政治局員兼第一副首相」なのであって、今日のクレム
リンで中ソ関係や中朝関係に大きな影響力をもつアリエフ氏がソ連共産党首脳

の肩書で、中国側とせよに対日戦勝四十周年を祝っていたという新事実には注
目せざるを得ないだろう。

同じ九月三日の午後、私が出た旧知のチフウインスキー外交学院長は、ソ
連の中国学界を代表して唯一人アカデミー正会員であるばかりか、かつては中
ソ国境会談の顧問もつとめ、現在はソ中友好協会副主席として中ソ関係の改善
に重要な役割を負っている大御所だが、最近の中ソ関係について、「いよいよ
党と党との関係改善が日程にはほるのではないかと私の質問にたいし、

「私たちにとっては党も政府もない。私たちは全員、ソ連共産党の代表なので
す」と答えていたエグが印象的であった。

その前日、ソ連科学アカデミーのアメリカ・カナダ研究所で懇談したとき
は、これも旧知のルーキン極東政治課長が、この十月に、同研究所のアルバー
ト所長とせよに中国の国際関係研究所の招待で初めて訪中する工を、いか

にも樂しげに話っていた。

ゴルバチョフ書記長の過般の『タイム』誌とのインタビューにもアルバート・フ所長が同席していたことにも示されるように、党中央委員でもある同所長は、対米政策にかんして依然としてクレムリンのブレン役をとめて、人物であるだけに、この小さな事実も、最近の米中ソ関係を反映するものとして注目されねばなるまい。

ソ連科学アカデミーの数多くの研究所のなかでも、ソ連のアジア政策に大きな影響力をもっているのは、世界経済・国際関係研究所と極東研究所である。これに比して、東洋学研究所や社会科学技術情報研究所は、よりアカデミックな立場を持っているといえようが、世界経済・国際関係研究所のヤコブレフ前所長が今回の一連のゴルバチョフ人事で党中央宣伝部長に任命されたことに示されるように、ソ連におけるアカデミーはこの国の政策形成にも大きな影響を与えている。

極東研究所長には、この夏に強寇五十二歳のチタレンコ氏が就任したが、これもゴルバチョフ人事の一環であって、同所長は就任後、初めての日本学者としてこの私との会見で、「中国が主張している(中ソ)関係改善のための三大障害は、鄧小平が日本やアメリカに与えた贈り物だ」と語っていた。

今回の訪ソに於て私の得た印象は、もとの従来からの私の中ソ和解説を改めて確認させたけれども、いまの中ソ関係のみならず、モスクワ平壤・北京のあいだにも、さらに将来的にはソノイとのあいだにも「ゆるやかな同盟関

係」が形成されつつあるのだといえよう。

中国内政の急化に伴って、中国側の対ソ認識が根本的に変わり、ソ連を敵視する戦略から大きく転じていることが、このような「ゆるやかな同盟関係」を可能にしているのである。

戦略的次元で見ると、アメリカのSDIの開発、朝鮮半島の将来構想、ソ連のS20の極東配備、将来のシベリア開発、そして日本のG21-1%枠問題や、いわゆる「日本軍国主義」批判にかんし、これらユーラシア社会主義諸国が同一の立場に立ちつつあることを、私は今回改めて確認せざるを得なかった。

ゴルバチョフ体制発足以来半年の足取りを直視し、また、ソ連社会の硬直したシステムを知れば知るほど、ソ連はいま大きな変遷期にさしかかっているように思われる。

今日、ソ連では、非レジネツ化、が明らかに進捗しつつあり、それだけにアンドロポフ時代への評価は高まって高い。そしてゴルバチョフ体制の根本的な利点は、リーダーシップが大きく若返っている点であり、彼らには十分な時間がある点である。

いかにゴルバチョフ個人がスマートで若くても、ソ連という体制は動かせるものでない、と力をこめていっているが、その代価は日本外交にとっても、きわめて大きいものになりはしないだろうか。

(九月二十一日)